

## 特集 「歴史学の現在 二〇〇五」に寄せて

史学研究会の『史林』は、歴史学・考古学・地理学におよぶ総合専門誌として、「論説」「研究ノート」「書評」等の掲載を目的としている。分野ごとの専門誌が通例化した今日、総合誌である本誌の存在は、各分野におけるすぐれた専門研究に発表の機会を提供する意義に加えて、分野をまたいで学界全体が共有しうる成果を確認するという貴重な役割を持つものと確信している。しかし、一方で近年、歴史学における研究の専門化や細分化はますます進行し、ひどい場合、特定領域の論説や書評はごく限られた人びとの関心を呼ぶのみで、同分野でも内容や研究史上の意義が理解できない状況があるようにさえ言われる。歴史学が幅広い総合の学問である以上、歴史学の学問的現状はたえず問われてよい。たとえば、専門研究がときに陥りやすい閉塞状況を打開する手だてとして、本誌が担う役割の一つは、分野間の研究者の相互理解を活発にすることに加えて、各分野においても、現在の研究課題や問題意識、分析手法について視野の広い議論や確認の場を提供する方向にあるのではないか。編集委員会は、歴史学のありようを省みる議論を重ねている。

本号が「歴史学の現在 二〇〇五」と題し、『史林』として初の特集を試みるのは、以上の論議をふまえてのものである。歴史学の総合専門誌のなかには、それぞれの領域ごとの研究動向と課題を、毎年網羅的に扱い特集したものがすでにある。しかし研究動向というものを学界全体に有意義にしようとするとき、年度ごとに研究論文を列挙し、概観するといった体裁を採るだけでは十分とは言えないであろう。むしろ、それぞれの領域において議論を呼ぶ意味あるテーマに焦点を当て、長期の研究史を踏まえて課題の分析と将来を展望する、いわば長い射程を持った問題整理が是非とも必要であろう。

本特集は、そのような理解をもとに、各領域でいま議論が沸騰しつつあるテーマに注目し、新たな知見、あるいは見直

されるべき重要な視点を確認することを通して、今後の歴史研究を見据えるという方法を探っている。日本の中世後期に光を当てて社会経済史研究の現状を確認する論考を筆頭に、中国における従軍慰安婦研究の状況、中世ヨーロッパの紛争論の展開、現代アメリカと「帝国」論の射程、過去認識をめぐる歴史地理学の試み、という五つのテーマをとりあげている。国内外で活発に展開されるホットな議論、また重要な視点、そして生み出されつつある新しい潮流を紹介することで、当該テーマの研究の深化に資するとともに、領域をこえた研究者にも新しい刺激を提供することを目的としている。各論稿が、歴史学に携わる多くの識者の関心を喚起し、幅広い読者を得るものであることを切に願っている。

なおこの特集号を契機に、本誌には「研究動向」や「論文評」というコーナーがあることにも気づいていただき、各コーナーへの投稿者が多数現われれば望外の幸せである。本誌では二〇〇四年五月以来、従来の「論説」「研究ノート」「書評」などにとどまらず、研究動向の紹介や検討、また個別論文に対する論評の場の設定など、多様な方法での誌面の充実をはかっている。そのため、かつて原稿用紙五〇枚であった「研究動向」の規定枚数を「論説」と同じ八〇枚とし、また「論文評」（同二〇枚）という新項目を加えている。

二〇〇五年一月

史学研究会理事 長

紀 平 英 作